

## はじめに

「今時、世間に蘭学といふこと専ら行はれ、志を立つる人は篤く学び、無識なる者は漫りにこれを誇張す」とは、『蘭学事始』（一八二五（文化二二）年）の冒頭で杉田玄白（一七三三～一八一七）が記した一節です（杉田『蘭学事始』岩波文庫、一九五九年）。

また、夏目漱石は一九一一年（明治四四）年八月に明石で行った講演「道楽と職業」のなかで、次のようにいいます。「道楽といひますと、悪い意味に取るとお酒を飲んだり、また何か花柳社会へ入ったりする、俗に道楽息子といひますね、ああいう息子のする仕業、それを形容して道楽という。けれども私のここでいう道楽は、そんな狭い意味で使うのではなく、もう少し広く応用のきく道楽である。善い意味、善い意味の道楽という字が使えるか使えないか、それは知りませぬが、だんだん話していくうちにわかるだろうと思う。もし使えなかつたら悪い意味にすればそれでいいのであります」（夏目『社会と自分』ちくま文庫、二〇一四年）。

なぜ「はじめに」で、一見おおよそ「観光」とは関係がなさそうな話から始めるのか？と問われそうですね。本書の表題が『観光学事始め―「脱観光的」観光のススメ』であるがゆえに、その「もじり」のひとつかと思われる人もいるでしょうね。また、深読みする人は、『蘭学事始』の底本を広く流布させるうえで大きく貢献したのが『学問のすゝめ』の著者、福沢諭吉であることにちなんで、「事始め」と「ススメ」か……と思われるかもしれません（少し考えすぎかもしれませんが）。

そうすると、漱石の引用については、ますますもって「脱観光」を気取つてのゆえ、と思われそうですね。い

ずれにしても杉田・福沢・漱石が連想されるかもしれないということは否定しませんが、彼らのような偉大な思想家に及ぶ術などまったくありません。

しかし本書を著そう、そして編あもうとしてこの表題を想定したときに、冒頭に記した杉田玄白と夏目漱石の一節が思い浮かんだのは事実なのです。

例えば、杉田がいう「蘭学」を「観光学」に置き換えてみてください。またさらには、漱石がいう「道楽」を「観光」に置き換えてみてください。現代の「行為としての観光と、学びとしての観光」に関わる問題に突き刺さってきませんか。私はそんな気がしてならないのですが。

また福沢の、当時稀代のベストセラーとなった『学問のすゝめ』（初出…一八七二（明治五年））では、学問としての実学を確かに勧めはしていますが、ただ単に実務的・実利的な営為を勧めたのではなかったはず。たとえばというならば、読み書きそろばんと基本的な道徳とのバランスのとれた学びを求めているのに違いありません。経済と文化のバランスをとることの必要性について、抽象的な理論としてではなく、普通の人々が普通にわかりやすく理解できるようになることを「学問」として求め捉えていたに違いありません。このこともまた、観光についての考え方や在り方に、どこかで通底するのではないのでしょうか。

「文字を読むことのみを知って物事の道理を弁えざる者は、これを学者と言うべからず。いわゆる論語よみの論語しらずとは即ちこれなり。我邦の古事記を暗誦すれども今日の米相場を知らざる者は、これを世帯の学問に暗き男と言うべし。経書史類の奥義に達したれども、商法の法を心得て正しく取引をなすこと能わざる者は、これを帳合の学問に拙き人と言うべし」（福沢『学問のすゝめ』岩波文庫、一九四二年）。福沢の言説をどう読み取り読み解くかについては、確かに様々な解釈ができるかもしれませんが、「文字を読むこと」「論語よみ」であること、あるいは「古事記を暗誦することや「経書史類の奥義に達」することなどの、いわば机上の学問をまったく否

定したり軽視したりしていたわけではないでしょうし、また逆に実学や実用に資することがすべてと考えていたわけでもないと思います。

前者がなければ後者はなく、また後者を通して前者も確認、あるいは再発見できるに違いない、そう考えていたと思うのです。こうした捉え方は、観光を学ぼうえでも同様のことがいえるのではないのでしょうか。

昨今、観光を声高に叫ぶ人ほど「米相場を知」ることのみが必要と考え、「経書史類」の伊呂波いろはすら無視して、「如何にして観光客にお金を落とさせせるか」(なんと思いやりや優しさのない言葉か)ということだけに執心しているような気がして仕方ありません。

観光の究極の奥義は、そのまちにくらす人たちがいかにこころ豊かでありえるかということにあり、その実現のための経済的波及効果のすべてまでを否定するところではありません。しかし経済的波及効果が地域文化を損なうようなことがあったときには、その地域経済の現象の形態を一定オルタナティブにみつめなおす必要性があるということなのです(本文中では、「オルタナティブツーリズム」という言葉も出てきます)。

なお少し余談めきますが、「オルタナティブ(alternative)」という言葉は、日本語の一言で訳し切るのはなかなか難しいようです。ゆえに「もうひとつの……」といった具合にわかったようなわからないような意になってしまいます。観光を語る現代の文脈のなかにもそのような語彙はたくさんあります。本書では仮にそうした言葉を使いながらも、著者なりのわかりやすい解釈に基づきながら記していきたいと考えています。<sup>1)</sup>

ちなみに「オルタナティブ」という概念が意味するところを、『広辞苑』が巧みに解釈していることを本書の第3講3で紹介しました。これを観光の文脈で使うとしたら、例えばこのように使ってみたらいかがでしょうか(これは、あくまでも私の勝手な解釈にしかすぎませんが)。

対象となる観光資源や観光現象に関わるモノ・コト・ヒトに対して、対決して真つ向から全否定するのではなく（とりわけ感情批判などもつてのほかです）、良き部分は認め活かしながら、生じた矛盾と向き合い対峙しつつ、良き部分を活用することを通して、生じた矛盾を解消し、より良き観光を実践・実現していくこと。そのためには、ステレオタイプ（紋切型）とモノカルチャー的（ひとつの文化現象至上論的）発想こそが、克服されるべき対象となるのです。

この書を編むうえで、「脱観光」を観光論義のなかで活かしていけたらと考えましたので、この「オールタナティブ」に関わる私なりの定義を通して、今一度確認していただき、その意図するところを拝察してもらえればと思います。

本書における各共著者の方々の論考は、そのための大きな導きの糸として示唆を与えてくれるものと確信しています。読者のみなさんは、ゆっくりと味読してください。もちろん、各章のなかでとりあげられ援用されるであろう思想家の考えから、生活者としての私たち常民が、日夜喜怒哀楽とともに、市井でくらしをつむいできた日常の思想（常民の思想やくらしの流儀）に至るまで、一見すれば「観光論」とは思えないものも出てくるかもしれませんが。しかし「観光」とは、ある意味で学際的な日常の営為でもあるため、それらはどこかで必ず通じてくるはずです。例えば、第2講で記した五感や第六次産業の問題についてもそうでしょうし、最終講で登場するある数学者のエッセーも、地域の観光を考えるためには、重要なヒントが隠されていると私は考えています。

まさに仏陀のいう「縁起の教え」かもしれないませんが、「脱観光」の発想こそが、巡り巡って「観光」に通じていくのだということに、想いを馳せてほしいと感じています。<sup>2</sup>とりわけ、岩崎竹彦による柳田國男、そして福祉と回想法に関わるふたつの講（特講①・特講②）、そして古田菜穂子の哲学的エッセーといえるふたつの講（特講

③・特講④は、おおよそ狭義の観光という視点からは関係性の希薄さを与えてしまうかもしれません。しかし、繰り返して述べてきたつもり「脱観光」の「脱観光」という言辭は、「観光」という本来多様で広義なものをいい当ててとした言の葉であり、決して「風吹けば、桶屋が儲かる」式の意図からではありません。

その点からいえば、ある意味でこのふたりの言述は、本書における「脱観光」の真骨頂と捉えてもらってもいいでしょう。

さらに蛇足を描いてしまうことを恐れずに行いましょう。直前の註(2)に記したように、山出保(金沢市元市長)からの示唆が私自身のなかで長い間あたためられたことで、先の拙著『くらしのなかの文化・芸術・観光―カフェでくつろぎ、まちつむぎ』(二〇一四年)のⅢ部のタイトルが「くらしのなかでつむがれる観光―「脱観光」観光のススメ」となったのです。それが、本拙編著刊行の誘因となったのかもしれませんが。

さて本書は八月に上梓されることになるのですが、共著者の方々にとっては、前年度桜の頃を、映画というならば「克蘭クイン」、そしてつゆの候を原稿の真っ只中に置き(晴耕雨読ならぬ晴耕雨筆)、そして翌年初を原稿最終締め切り、すなわち「克蘭クアップ」にするという、一年のなかで最も多忙な時期から最も憂鬱な時期に仕込みを入れて、そして再びの多忙期にフィニッシュという原稿作成作業となってしまうました。しかし実は、そんな時期にこそ私たちのような生業を持つ者たちにとって却って仕事は捗るのかもしれませんが。みなさんの論考は、生き生きと愉しく臨場感溢れる筆致で進んでいますので、読者のみなさんにもそれを存分にお愉しみいただければと思います。

屋上屋を重ねますが、稀代の都市観光家でもあった永井荷風(一八七九―一九五九)は、その実践的記録を多く記述のなかに散りばめています。彼の作品の多くは、当時の東京というまちを通して観た、わが国の「都市観光史(誌)」の一断面を語って尽きないのです。

『つゆのあとさき』もまたそのひとつであり、初出は一九三二（昭和六）年の一〇月のことなので（『中央公論』誌上）、六月には一生懸命に原稿を書いていたかもしれないね。そして、荷風のこの作品へのオマージュなのか、シンガーソングライターのだまさしは「つゆのあとさき」という楽曲をつくっています（一九七七（昭和五二）年リリース）。その一節、「つゆのあとさきのトパーズ色の風……」に、当時まだ学生だった私はいよいよもなく惹かれた記憶があります（併せて、さだの「主人公」（一九七八（昭和五三）年リリース）という楽曲もなぜか示唆的です。「……自分の人生の中では誰もがみな主人公……」、人にとつての唯一無二の人生、そして人がくらすそれぞれのまちも、それぞれが固有の歴史や生活文化を持った唯一無二のまちなのですから。そしてさらにこの楽曲が持つ歌詞で示唆的なのは、自分自身の過去を悔いてノスタルジックに終わらせるのではなく、それを糧にしながら前向きに自己を創造していくことを求めている点です。なぜか観光にもつながるところがありますね。負の文化遺産に目を閉じるのではなく、それを新たな正の文化を創造するための試金石にしようとする行為などを連想してみてください<sup>3)</sup>。

ところで「トパーズ色」とは、ご存じのようにスカイブルーに近い色です。つゆの晴れ間の空の下、「書を携えてまちに出る」（最終講参照）のも一興でしょう。

一方で「トパーズ」の語源は、ギリシア語の *topazos*（探求すること）であるという説もあります。さだがこのギリシア語を想定していたのかどうかはわかりませんが、雨の日には晴耕雨読よろしく、思索に耽ってみるのもいいかもしれません。そして晴れた日にはまちに出る！

つまるところ読者のみなさんには、雨の日は書齋で、晴れた日はまちにこの本を携えて出ていただくことで、末永く本書を愛読していただければ望外の幸であるという一言が良かったがための極めて迂遠な前書でした。そしてさらに迂遠ついでになります<sup>4)</sup>が、最後に柳田國男の『遠野物語』（初出…一九一〇（明治四三）年）の冒頭の献辞「此書を外国に在る人々に呈す」を戯画風に綴りおくことをご寛恕ください。

此書を「いかにして観光客にお金を落とさせるか」と執心する人に呈す

二〇一五年夏の風と匂いのなかで

時の名残が少しある、いつもの喫茶・風月堂にて風に遊ぶことを想いつつ、「六二番のバス」を待ちながら……

著者を代表して 井口 貢

註

(1) わが国でも構造主義や記号論の影響もあってか、一九八〇年代前後を中心にいわゆる「ニューアカデミズム（ニューアカ）」が現代思想界で一世を風靡しました。私もまだかろうじて学生であった頃のことですが、周囲の友人たちはこぞって雑誌『現代思想』（青土社）を購読し、また栗本慎一郎、中沢新一、浅田彰ら諸氏の著作を小脇に抱えていたことをよく覚えています。その頃に少なからずの「外来語」が、わかったかわからないかが本人の心のなかには未着のまま、高校生以上の若者の間で定着していきました。本書では、その頃からよく使われた言葉も時としてあえて使用しています。そしてそれを、観光の文脈のなかで置換しながら、今一度自戒の念とともに、改めてその意味を可能な限りわかりやすく確認してみることが試みています（第1講1の「デイスツール」は象徴的ですな）。実はこうした手法は、前拙著『くらしのなかの文化・芸術・観光—カフェでくつろぎ、まちつむぎ』（法律文化社、二〇一四年）においても若干試みています。

そしてそれは、ある意味でネガティブな方法となっているのかもしれませんが、「インテリぶりたい人」（小谷野敦『頭の悪い日本語』新潮新書、二〇一四年、六〇頁。これはなかなか面白い本です）へのメッセージとしたつもりです。何よりも、観光は「インテリぶって」は叙述できないということを、稀代の碩学・宮本常一（一九〇七—一九八一）は身をもって、そして書をもって伝えようとした（宮本の学問を物心両面から支えた洪沢敬三は、宮本に対して、「学者になつてはいけな」と論じ、宮本はその弟子たちに「学者に向けて書いてはいけない」と伝えたといいます。その深い意を改めて理解してみたいと思います）。

(2) この「脱観光」的ともいえる観光の着想に、私がひとつの大きなヒントを得たのは、もう今から十数年も前に見聞した山出保金沢市長（当時）の、「金沢を観光都市と呼んで欲しくない」という趣旨の発言でした（『學都』第五号、都市環境マネジメント研究所、二〇〇三年）。なお、二〇一四（平成二六）年の七月に岩波新書のなかの一冊として、山出氏の「金沢を歩く」が出て、多くの読者からの支持を得たようです。本書における本康宏史の論考と併せお読みいただきたいのも一興です。

(3) 京都の産業観光をも象徴する場所のひとつとして、「東映太秦映画村」があります。ここで時としてみかけ、あるいは映画・テレビの映像でも出会うことができるある名優がいます。福本清三氏がその人です。今年で七二歳と聞いていますが、「斬られ役・五〇年、五万回斬られた男」という言葉を耳にすると多くの方は、「ああ、あの人か」と思うのではないのでしょうか。福本氏は、ある日テレビのインタヴューに応えながら、「絶えず、陰ではなく陽だと思つてやってきました」と笑みを浮かべていました（二〇一四（平成二六）年六月二九日、「シューイチ」日本テレビ系列）。すなわち、バイプレーヤーや端役では決してなく、主役のプライドを持つことで、長年に渡つてこうした役を演じてきたのだという意で語りかけたのでしよう。その心意気があったからこそ、二〇一四年七月に全国公開された（京都では六月に先行上映、もちろん私は観ました）『太秦ライムライト』で名実ともに主演を任せられることになったのでしよう。そんな矜持と気概を持つことが人にもまじにも必要なのです。例えば、本書の第6講をみてください。井波や高岡に住まう人たちとまちに対する矜持が、そこから十二分に感じ取ることができるはずですよ。加賀藩のなかで金沢だけではなく、私たちもまた「主人公のひとりだ」と。

さらに補足しましょう。『太秦ライムライト』の劇中で、エキストラの人たちを「虫ケラ」のように扱う、若く鼻もちならない映画監督が登場します。福本氏が演じる香美山清一は彼に抵抗し謹慎処分にあります。撮影所の事務所長の長沼兼一（本田博太郎氏が好演）が監督に発した一言が重く心に響きました。「太秦にはエキストラはいません。みんな表現者、演者なのです」と。私たちは、「常在観光」を主張し、どのまちにも必ず、キラリと光る文化資源や観光資源があると考えています。長沼の言葉は、そのこととどこかで通じるのではないのでしょうか。一見日陰にみえ、ネガティブに感じられてしまうようなものでも、視点を変えてみればポジティブで創造性を持ったものになりうる、それもまた観光の力かもしれませんね。

(4) 前拙著『くらしのなかの文化・芸術・観光—カフェでくつろぎ、まちつむぎ』（法律文化社、二〇一四年）に引き続き、その続編のようなこの編著、しかも一風変わった観光の本を書くことを、このような出版事情厳しき、時世のなか、「洛陽の紙幣を高めること」甚だ心もとないにもかかわらず、快くお引き受けいただいた法律文化社の田藤純子社長と編集担当の上田哲平氏には、共著者一同になり代わり衷心よりの御礼を申し上げます。